

## 20<sup>th</sup> Symposium of the International Committee for Pre-Ottoman and Ottoman Studies (CIÉPO) に参加して

江 川 ひかり

CIÉPO (シエポ) の名で親しまれてきた「オスマン朝以前およびオスマン朝研究国際会議」の第20回大会が、2012年6月27日から7月1日まで、ギリシアのクレタ島、クレタ大学レシムノキャンパスにて開催された。

主催者であるクレタ大学歴史・考古学学部 The Department of History and Archaeology of the University of Crete および地中海研究所 the Institute for Mediterranean Studies of the Foundation for Research and Technology-Hellas (IMS/FORTH) から、本大会の開催日程および発表者の公募が配信されたのは、2011年7月15日のことであった。以後、約一年間、実に秩序だった事務体制によって、大会が成功裏に終了した。このことは、尽力して下さったクレタ大学のアントニス・アナスタソプロス Antonis Anastasopoulos, エリアス・コロヴォス Elias Kolovos, および地中海研究所のマリノス・サリヤニス Marinus Sariyannis をはじめとする有能かつ誠実で底抜けに明るいスタッフの皆さんのおかげであったことをまず申し述べておきたい。

なぜならば、この一年間、開催国ギリシアに関するニュースが日本においても連日のように報道されていたように、ギリシアの政治・経済情勢は緊迫し続けていたからである。開会式の挨拶の中で、アナスタソプロスは、「とある問題によって、学生たちはボランティアで本大会の事務を支えています」とおっしゃり、開場は静かにかつ温かい苦笑に包まれたシーンが印象に残る。

そもそもシエポとは、Comité International des Études Pré-Ottomanes et Ottomanes の略称で、その歴史は40年前にさかのぼる。1972年9月19-23日、オスマン経済史家の故オメル・ルトフィ・バルカン教授を会長とし、彼を含め今やすべて故人となってしまった10人の研究者が一同に会することによってCIÉPOは発足した<sup>1)</sup>。その後、CIÉPOは以下のように、基本的には2年に一度開催されてきた。

---

1) CIÉPO Nedir?, haz. Tuncer BAYKARA, *CIÉPO Osmanlı Öncesi ve Osmanlı Araştırmaları Uluslararası Komitesi : XIV. Sempozyumu Bildirileri 18-22 Eylül 2000*, Çeşme, 2004, IX-X.

- |           |  |           |                            |
|-----------|--|-----------|----------------------------|
| 第1回 1974  | Napoli, Italy                                  | 第2回 1976  | Hamburg, West Germany      |
| 第3回 1978  | Sarajevo, Yugoslavia                           | 第4回 1981  | Cuenca, Spain              |
| 第5回 1982  | Tunis, Tunisia                                 |           |                            |
|           | ・ 1983 Wien, Austria (Interim Symposium)       |           |                            |
| 第6回 1984  | Cambridge, UK                                  | 第7回 1986  | Pécs, Hungary              |
| 第8回 1988  | Minneapolis, USA                               | 第9回 1990  | Jerusalem, Israel          |
| 第10回 1992 | Ankara, Turkey                                 | 第11回 1994 | Amsterdam, the Netherlands |
| 第12回 1996 | Prague, Czech                                  |           |                            |
|           | ・ 1997 Budapest, Hungary (Interim Symposium)   |           |                            |
| 第13回 1998 | Wien, Austria                                  | 第14回 2000 | Çeşme, Manisa, Turkey      |
| 第15回 2002 | London, UK                                     | 第16回 2004 | Warsaw, Poland             |
| 第17回 2006 | Trabzon, Turkey                                | 第18回 2008 | Zagreb, Croatia            |
|           | ・ 2009 Bishkek, Kyrgyzstan (Interim Symposium) |           |                            |
| 第19回 2010 | Van, Turkey                                    | 第20回 2012 | Rethymno, Greece           |

上記に示した3回の中間大会を含めると延べ23回目、定期大会のみとしては第20回目の大会となった本大会が、ギリシアのクレタ島で開催された意義は深い。この点に関して、「Revisiting Early Ottoman History」と題した基調講演においてエリザベス・A・ザハリアド Elizabeth A. Zachariadou (IMS/FORTH) が戦後のオスマン史研究を整理する中で、第1に、ギリシアはバルカンにおいてオスマン史研究機関の創設についてはアルバニアよりも最も遅れており、1984年からオスマン史研究が本格化したこと、第2に、ギリシアにおけるオスマン前史およびオスマン史研究の発展は、トルコにおけるビザンツ史研究の発展と協力関係にあった、さらには共同研究によってもたらされた点を指摘した。すなわち、トルコ共和国およびギリシア共和国両国の政治・経済変動および二国間関係が動揺する中で、オスマン史研究が両国の研究者による協力関係の中で発展してきた事実をあらためて指摘することで、戦後のオスマン史研究をけん引してこられたザハリアドが、学術研究の独立性を毅然たる態度で強調されたのである。オスマン帝国史において、時にはぶつかり合ったが、長きにわたり複数の文化的背景をもつ人びとが共存・融合しながら発展してきた重要な地域のひとつがクレタ島であったことはいうまでもない。

本大会のテーマは、'New Trends in Ottoman Studies'であり、サブ・テーマとして、下記の8項目が設定された。

- 1) 'Sources : new interpretations and approaches'
- 2) 'Ottoman mentalities, attitudes, ideas'
- 3) 'The early modern Ottoman Empire'
- 4) 'Reconsidering the 'state v. society', 'centre v. periphery' paradigms'
- 5) 'New approaches in the study of the Ottoman economy'

- 6) 'Ottoman urban history'
- 7) 'Rural studies in the Ottoman context'
- 8) 'Explorations in Ottoman culture: literature, art, architecture'

これらのサブ・テーマを見れば、ほとんどのオスマン史研究がいずれかに該当することは明白であろう。これらのサブ・テーマに基づいて、34 パネル（1 パネルにつき 4 名から構成されたものに限る）として 136 名と、加えて 56 名の個人報告との、合計 192 報告が公募された。結果的に大会当日に配布された『プログラムおよび要旨集』<sup>2)</sup> によれば、28 パネル 102 報告、および個人報告 121 を合わせた合計 223 報告が掲載されており、公募を上回る数の申請が受理されたことを示している。

本大会では基本的に 5 会場で発表が同時に進められているため、筆者が出席あるいは把握し得た報告の内容は全体のごくわずかにすぎないことをあらかじめお断りした上で、特に筆者が目にしたパネルあるいは報告を以下に紹介したい。

第一に、サブ・テーマの 1)、6) および 7) に関わる内容としては、開催地がクレタ島であることから、オスマン朝支配下のバルカン・地中海周辺諸地域における政治・経済・社会状況を、あるいはそれらの諸地域とオスマン中央政府との関係を明らかにする報告が多く見られた。例えば、トルコの 9 Eylül 大学の教員を中心としたパネル（以下、イタリック体表記はパネル名を、普通字体は単独発表名を示す）*Yeni Kaynaklar ve Yeni Yaklaşımlarla Osmanlı Egemenliği'nde Girit ve Sonrası*（座長 A. Nükhet Adıyeyeke）（以下括弧内の名は座長名を示す）では、オスマン朝のワクフ制度の下、非ムスリムのワクフが承認される重要な事例となった「レシムノ修道院ワクフ」に関する新史料を中心に、クレタ島の社会・経済史および人口動態を明らかにした。*Eastern Mediterranean Islands under Ottoman Rule*（M. Akif Erdoğan: Ege Üniv.）ではクレタ島およびキプロス島の事例に、*Osmanlı Devleti'nin Sürgün Politikası ve Akdeniz Adaları*（M. Metin Hülügü: Erciyes Üniv.）では、オスマン朝における流刑地として、あるいは遊牧民等を動員した移住政策地としての地中海諸島に焦点を当てた。また、*The Lower Classes of Ottoman Salonica (Thessaloniki) during the 18<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> Centuries*（Minna Rozen: Haifa Univ.）で、座長のローゼンは、19 世紀中葉以降テッサロニキにおける工業化によって生み出された女性・子供を含んだユダヤ人労働者階級に、社会主義運動が浸透することによって生じた実態を、新聞・雑誌をはじめとして未公開史料を用いて描き出した。このパネルを含めて、ギリシアのテッサロニキに関する報告はあわせて 9 本にも上った。

---

2) 20<sup>th</sup> CIÉPO Symposium: *New Trends in Ottoman Studies Programme & Abstracts, Rethymno, 27 June - 1 July 2012*, The Department of History and Archaeology of the University of Crete and the Institute for Mediterranean Studies of the Foundation for Research & Technology — Hellas (IMS/FORTH), in collaboration with the Region of Crete, Regional Unit of Rethymno, and the Municipality of Rethymno, 2012.

さらに、*From Byzantine Adrianople to Ottoman Edirne* (Amy Singer: Tel Aviv Univ.) のパネルにおいて、ヒース・ローリー<sup>3)</sup> *14<sup>th</sup>-Century Zaviye-Imarets in Edirne and Eastern Rumeli: An Overlooked Facet of the “Ottoman Method of Conquest”* は、エディルネにおけるオスマン朝初期の修道場——慈善施設 (*zaviye-imarets*) がムスリムのみならず非ムスリムも含めた万人に開かれた施設であり、それゆえにこれらの施設がデルヴィーシュおよび貧しいキリスト教徒が混ざり合う環境を提供したこと、すなわち初期征服期における人々の社会的ネットワークを創出することが企図されていたことを強調した。

エディルネにある1447年に竣工したウチュ・シェレフェリ・モスクに関して、建築史が専門の川本智史<sup>4)</sup> は、*The Courtyard of Üç Şerefeli Mosque: A Point of Contact between Mosque and Palace Architecture* で、年代記等のオスマン語史料に依拠しながら、オスマン朝モスク建築史の変わり目として知られている最初のスルタンのモスクである同モスクに導入された中庭の機能とは、スルタンの即位式に付随しておこなわれた帯剣式用ではないかと問題提起した。

第二に、サブ・テーマ3)の「近世 (The early modern)」というキーワードを掲げたものには、*Shifts in Ottoman Political and Intellectual Mentalities over the Course of the Early Modern Period* (John J. Curry: Nevada Univ.) をはじめ12報告あり、注目が集まった。とりわけ、アンカラ大学からビルケント大学へ移り、ハリル・イナルジクの後継者的雰囲気醸し出していたオゼル・エルゲンチ Özer Ergenç が、ニル・テクギュル Nil Tekgül と共著で報告した “Ideal/Role Model” Defined for the Ottoman Individuals and its Change throughout Time では、考察の前提としてオスマン史を ①「古典」時代16世紀まで、②「ポスト古典」時代17世紀～18世紀、③「近代化」時代と3つに区分し、①および②は西洋史でいう「近世」であると区分した上で、西洋史の時代区分ではオスマン史における時代の主要なあるいは決定的な変換期を十分に説明できない点を指摘している。この指摘はもっともな指摘であるが、オスマン史研究においても、西洋史あるいは日本史でいう「近世」と敢えて同じ土俵に載せて議論することは、永田雄三<sup>5)</sup>も問題提起しているように、比較の可

3) 15・16世紀を中心とした政治・社会研究が専門で、1993年以来、プリンストン大学の教授である Heath W. Lowry は、現在、イスタンブルのパフチェシェル大学の特別客員教授も兼任し、英語・トルコ語両言語による *Historical Vestiges of Niyazi Musri's Presence on the Island of Limnos · Niyazi Musri'nin Limnos Adası'nda Bulunan Tarihi İzleri*, Bahçeşehir University Press, İstanbul, 2011 など精力的に仕事をしている。

4) 川本智史は、「15-16世紀オスマン朝の首都とイスタンブルの宮殿群——前近代オスマン朝の首都性の研究(その1)——」『日本建築学会計画系論文集』75-654, 2010, 2055-2061では、スレイマン1世治世まで、エディルネが、イスタンブルとともに2つの都として並行して用いられていたことを指摘した。また「学会展望 トルコ建築史・都市史」『建築史学』58, 2012, 110-126として研究動向を整理している。

5) 永田雄三『前近代トルコの地方名士——カラオスマンオウル家の研究——』刀水書房, 2009, 237-242.

能性を広げることとなり、今後も世界的視野からオスマン史を再考する上で有益であると思われる。

第三に、19世紀から20世紀初頭にかけてのいわゆる「近代化」をめぐる問題に関する報告も多数見られ、活発であった。ブルサのウルダー大学教員によって構成された、絹繭および絹織物産業の社会・経済状況に関する *1837-1923 Sürecinde Bursa'da Koza Üreticiliği ve İpekli Dokumacılık Sektörünün Sosyo-Ekonomik Durumu* (Cafer Çiftçi) は、地元の使用と役割に基づき、念入りに準備されたパネルと感じられた。

ルメリ鉄道敷設と「近代化」に関する研究を継続してきた齋藤優子（学術振興会 PD 研究員：明治大学）*Rumeli Demiryolları İşletmesi Kayıtlarına Göre 19. Yüzyıldaki Osmanlı Modernleşmesine Bir Bakış* は、ルメリ鉄道には鉄道敷設前と後の稼働状況を比較する史料が非常に乏しいが、一部残っている別路線の史料や当時のオスマン経済関連史料をもとに考察すると、ルメリ鉄道による経済的効果は路線ごとに限定的、地域的なものにとどまったことを結論づけた。

大河原知樹（東北大学）*Migration Movements and British-Ottoman Diplomatic Relations* は、後期オスマン帝国の東地中海地域における非ムスリム移民の動きには当時の複雑な政治的背景が存在していたと指摘し、シリアにおけるギリシア系・ユダヤ系家族が英国国籍を主張し、時にはこの件が英・オスマン両国の外交問題に発展していた事例を明らかにすることで、両国の交渉の中に帝国における非ムスリムの地位および戦略、さらには「治外法権」の問題が潜んでいたことを指摘した。

佐原徹哉（明治大学）*The Adana Incident of 1909 and the Muslim Refugee Question* は、従来、宗教・民族対立としてとらえられてきた1909年のアダナ事件について、1860年代、商品作物栽培が同地域に最も急速に導入され、灌漑等事業展開した富裕なアルメニア人地主と貧困なムスリム小作人という経済格差が出たことと、同地域が1870年代後半以降のバルカンおよびカフカスからのムスリム難民の定住地となったことによって、いわば社会経済的背景からアルメニア人とムスリムとの対立が生じたことを指摘した。

第4に、我田引水ではあるが、筆者が主宰したパネル *The Importance of Interdisciplinary Research Connecting Historical, Anthropological, Information and Engineering Sciences Based on the Case Study of Spatial-Temporal GIS (DiMSIS-EX) Application*<sup>6)</sup> を紹介したい。本報告は、1995年1月に発生した阪神淡路大震災発生直後に角本繁らによって開発さ

6) この学際研究は、現在、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」として、イスラーム地域研究の京都大学アジア・アフリカ研究科 KIAS（代表小杉泰）の公募研究「イスラーム法とテクノロジー」の枠内で継続している。詳しくは、『平成20年度 文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」委託費による「イスラーム地域研究」にかかわる共同研究課題の公募事業京都大学アジア・アフリカ研究科 KIAS（代表 小杉泰）公募研究イスラーム法とテクノロジー 2009年度 研究成果報告書（研究代表者 江川ひかり・明治大学）』あるいは <http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/kias/kyodo/koubo.html> を参照されたい。

れた時空間情報システム (DiMSIS-EX) を応用した歴史学・人類学・情報学・工学による学際研究であり、大会の中でも異彩を放ち、開催直前から「興味深いすごいパネルだ」「周到に準備されているパネルだ」とお世辞も含めて、直接に言われたほどであった。本パネルでは、以下の4つの報告がおこなわれた。

1. 角本繁 (東京工業大学), İlhan ŞAHİN (キルギス・トルコ マナス大学), 江川ひかり (明治大学), 梶谷義雄 (京都大学防災研究所), Halit Ramazan KUBİLAY (ドゥズジェ市役所)

Collaborative Research of History and Information Science: Difference of Recovery Procedure after the Earthquake Disaster Based on Each Culture.

2. 吉川耕司 (大阪産業大学), 梶谷義雄, 角本繁, 畑山満則 (京都大学防災研究所), 臼井真人 (鈴鹿工業高校)

An Introduction of the Spatial-Temporal GIS “DiMSIS-EX” and Its Application for the Recovery and Restoration Process after Large Disasters in Düzce City: Construction of the New Residential Area and Traffic Network.

3. 富田敬大 (立命館大学), 角本繁

Development Policy and Social Changes in a Suburban Area of Mongolia: Application of DiMSIS-EX to Anthropological Research.

4. 小杉麻李亜 (ニューヨーク州立大学), 角本繁

Qur’anic Manuscript Data on Computer: A Case of Applying DiMSIS-EX to Historical Studies.

とりわけ、1 および 2 は、東日本大震災後の復興も含めて、自然災害からの復興過程に、DiMSIS-EX を用いた学際研究がいかに重要かを示す意図があり、同時に、開催地クレタ島のクノッソス宮殿<sup>7)</sup>やフェストス遺跡が地震で崩壊したとも言われていることから、このパネルを開く意義は大きかったといえる。ただし、プログラム上、前述のオゼル・エルゲンチ座長の部会と時間帯がぶつかったこともあって、聴衆がやや少なかったことが残念であった。とはいえ、エイミ・シンガーやストックホルム大学のエルジビエタ・シュヴィエンツィツカ Elżbieta Świącicka などからは、他のシステムで使ったデータが DiMSIS-EX でも運用可能かどうかや、是非 DiMSIS-EX を利用してみたいという申し出など、熱心な質問が出された。

DiMSIS-EX は、従来の GIS やグーグルマップでは不可能な、時間的継続性をもつデータを整理し、可視化できる点にその特徴があり、それゆえに歴史研究に応用する価値が高いと筆者は考えている。このようなシステムを応用した研究手法も、新しい研究のあり方を問題

7) 本大会では、会議2日目の7月28日(水)夕方に、レシムノ市内史跡見学、4日目の30日(金)に、クノッソス宮殿の見学ツアーが組まれた。

提起できたと考えている<sup>8)</sup>。

さて、報告全体に関しては、いくつかの問題点も目についた。従来の研究史上に自らの研究を位置づけることなく、2、3の史料の解説のみに終始したり、発表時間の15分間、準備してきた原稿をひたすら猛スピードで読み上げる若手研究者が目立ったことも事実であった。筆者が英語の聞き取りが不得意という点はもちろんであるが、これだけパソコンも普及する中の国際会議において、パワーポイントも使用せず、ひたすら原稿を読み上げる若手研究者に、大御所の研究者が、聞こえないという仕草をしたり、「もう少しゆっくり話して」と声をかけたり、まゆをひそめる場面もあった。

同時にシエポが、以前のようないわゆる世界的にオスマン史研究をリードする、いわゆる大御所が一同に会する場から、若手研究者の登竜門的色彩を強くしているという声も聞こえてきた。この点に関しても様々な意見があがっているようで、必ずしも大御所のみ国際会議ではなく、若手の登竜門的性格ももちつつ、しかし、もちろん世界的に水準の高い研究発表・意見交換の場であることがこれからも期待されよう。なによりも、世界各地域から研究者が集まり、直接に出会い、議論・意見交換できることは貴重であり、新たな研究ネットワークが構築されていくことは、将来の研究向上にもつながるだろう。

このように会議のあり方にいくつかの問題を抱えながらも、今回のシエポが実りある大会となったことには、冒頭に述べたクレタ大学および地中海研究所関係者の尽力の賜物であることはいうまでもない。加えて、もうお一方、2008年大会終了後、前会長のバケ・グラモン Jean-Louis Bacqué-Grammont を引き継いだハイデルベルグ大学教授のミハエル・ウルシヌス Michael Ursinus<sup>9)</sup>の調整力と同時に思いやりのあるご人徳による部分も大きいのではないだろうか。彼は、本大会終了後に、2期目の会長に選出されたという。

今回、筆者は初めてクレタ島の地を踏むことができ、オスマン朝の統治時期・期間も、その内実も、ギリシア本土との間にズレがあり、クレタ島は、クレタ島独自の歴史として本土とは切り離して考えるべき要素が多いことを実感した。クレタ島の地中海研究所では、Digital Crete: Mediterranean Cultural Itineraries 事業として、クレタ島の考古学的地図やヴェネツィア統治時代・オスマン統治時代の諸文書、エル・グレコ作品集、クレタ音楽作品等のデータベース化を進めている (<http://digitalcrete.ims.forth.gr>)。今回は、シエポ大会のためだけの、しかも前期授業期間中であつたため駆け足の滞在となつたので、上記オスマ

8) 折しも、2012年6月6日にアジア地理情報システム学会 ANGIS (Japan) (Asian Network for GIS-based Historical Studies (Japan) (連絡先 東京大学大学院人文社会系研究科水島司研究室) が発足した。

9) Michael Ursinus 氏は、マフムト2世時代のビトラ (マナストゥル) 地域における地方改革 (*Regionale Reformen im Osmanischen Reich am Vorabend der Tanzimat*, Berlin, 1982) を始め政治史全般を専門とし、近年はバルカンにおける人びとの不平・不満に関する研究 (*Grievance Administration (Sikayet) in an Ottoman Province: The Kaymakam of Rumelia's 'Record Book of Complaints' of 1781-1783*, London and New York, 2005) を続けている。

ン時代の公文書の閲覧も含めて、是非、クレタ島を再訪したいと思っている。

40周年を迎える2014年のシエボ第21回大会は、トルコ共和国のコンヤあるいはルーマニアのブカレストが候補地として正式に公表され、本クレタ大会は幕を閉じた。

(明治大学文学部)